



TITLE:

サボタージュ是非

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

CITATION:

河田, 嗣郎. サボタージュ是非. 経済論叢 1919, 9(5): 749-757

ISSUE DATE:

1919-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127587>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷九第

行發日一月一十年八正大

論 說

特別課徴の課額の決定……………法學博士 神戸 正雄

社會の羈絆力(一)……………法學博士 財部 靜治

コールの大労働組合論……………法學博士 河田 嗣郎

鷹山公とフリードリヒ大王の農政(二)……………法學博士 高岡 熊雄

明治の米價調節(三)……………法學士 本庄榮治郎

時事問題

労働時間問題……………法學博士 戸田 海市

租税收入の豫算見積を論ず……………法學博士 小川 郷太郎

雜 錄

同盟怠業の道德的批判に就いて……………法學博士 河 上 肇

サボタージュ是非……………法學博士 河田 嗣郎

サボタージュに對する私見……………法學博士 神戸 正雄

近世の日本(新著紹介)……………法學士 本庄榮治郎

サボタージユ是非

河田 嗣 郎

一 サボタージユが同盟罷業と共に労働闘争の一手段として行はるゝに至りたるは比較的新しき現象である。而してそれは佛伊其他に於けるサンデカリストの好むで用ゆる所の手段であつて、普通の同盟罷業が英國在來の職工組合に依つて使用せらるゝ武器たるが如く、サボタージユはサンデカリズム流の労働組合に依つて廣く用ゐられ始めたものである。されば英國の如きに在りては、在來の職工組合主義ツレイト、ユニオンイズムに對して所謂新組合主義インダストリアル、ユニオンイズム又は産業的労働組合主義の發生するに至り、サンデカリズム風の思想が地盤を得るに至りて以來、サボタージユも亦労働闘争の一手段として其意義の認められ、又時々實行せらるゝことゝなつた。而してサボタージユなるものは、其の本來の性質よりいへば、彼の同盟罷業と同じく、職工組合の如きが或は勞賃の引上労働時間の短縮、其他の労働條件の改善を要求

するが爲めに、單純に労働の雇傭關係を改善する目的に對しても用ゐらるべきもので、又從來多くはその目的に對して用ゐられたのであるが然し近時労働運動が何となく、労働者階級の解放の爲めに、若くは將來に對する労働者の産業管理權の獲得の爲めに、多少政治的意味を含むで行はるゝに至れると共に、個々の工場に於ける同盟罷業は進みて總同盟罷業たらんとし、サボタージユも多少此の目的の爲めに用ゐられんとする風を生じて來た。

右の如き事情の推移につれて、サボタージユは、當初は單にたゞ同盟して仕事を怠ける、同盟してまづい仕事をするといふ位の意味で、サボタージユといふ詞自體も、字義通りに之を譯せば、徐行同盟 (Ca-Canny) といふべきものであつたのが、近時はやゝ其の性質を變じて來たのである。多少其の性質を變じてたゞ消極的に仕事を怠けるといふに止らず、積極的に雇主の利益を毀傷し、又は一般社會の危害を誘起すべき方法を講ずる如きものとなつて來た。即ちサ

ボタージユが、サンデカリスト特に革命的色彩を帯びたる所謂『赤色組合』などに依りて用ゐられ、總同盟罷業と同列に、直接行動の一として社會をして直接に勞働者の力を知らしめる手段として用ゐらるゝ場合多きを致しつゝあるが爲めに、それは多少づゝ漸次に危險性を帯びて來たのである。

我國に於けるサボタージユは、つい近頃行はれ出したばかりで、然かも單純に同盟怠業たるに止つて居る。而して我國の現狀に於ては勞働運動其者すらが、まだ經濟的に進むとも、やゝ政治的に進むとも定り兼ねるのであるから、サボタージユも亦、單純なる怠業たるに止るか、それとも西洋風に變化し行くかは、今の所豫言し難い。けれども予の信ずる所では、勞働運動は當初はたゞ勞働雇傭條件の改善の爲めに行はるゝに止るけれども、其の進むにつれて、或は勞働雇傭制廢止の爲めに、或は産業の勞働組合に依る管理といふべき事の爲めに行はるゝに至るは避け難い所で、又そう進むで行かなくて

は十分なる意義は出來上がり兼ねるものである。我國に於ても早晚かゝる狀態に進み行くものと見なければならぬ。又予は是非其域にまで進むで欲しいと希望するものである。從てサボタージユの如きに就いても、此の將來に對する洞見の下に、それが勞働運動の一表現として有する意義を考へ、其の鬭爭手段としての是非を判斷せなければならぬと思ふ。

二 同盟罷業にしてもサボタージユにしても其の本來の性質は、右述ぶるが如く、一の手段行爲たるに過ぎぬ。それが勞働雇傭條件の改善の要求の爲めに行はるゝにせよ、將又進むで勞働階級の解放、賃傭勞働制の廢止の要求の爲めに行はるゝにせよ、それは手段行爲として、特に一の鬭爭手段として意義を有するものたるに過ぎぬ。而してそが一の手段行爲たる限りは、それは必ずや其の目的とする所に沿ふものでなくてはならぬ。其の手段の爲めに目的が犠牲になつてしまつたり、其の手段の性質の惡きが爲めに折角善美なる目的が傷けられてはならぬ。

論者或は鬭争は人生其者である。殊に社會的なる階級鬭争は人類の歴史其者である。鬭争は從て永續的である。何時果てしのあるものではない。一鬭争終れば次の新たなる鬭争生じ、つまり人類は鬭争を繰返しつゝ進み行くに過ぎぬといふであらう。或はそうかも知れぬ。けれども之は鬭争とたゞ一口にいふからそうなのである。

その鬭争を一局面一局面に就いて見れば、必ずや或目的の爲めに行はれ、其の目的が達せらるれば、其爲めに行はれたる鬭争は茲にその意義を成就して消滅してしまはなくてはならぬ。現今行はれつゝある労働者の階級的鬭争の如きも即ち之れであつて、たゞ人類の社會的鬭争の現時に於ける一局面たるに過ぎぬ。終局的に之を云へば、それが資本主階級を打亡ばし、資本主義制の經濟組織を打破してしまつて、新たなる生産組織を造り上げたならば、茲に其の鬭争としての意義は成就して消滅してしまはなくてはならぬ。此の意味に於て労働鬭争の一方法として行はるゝ同盟罷業やサボタージュの如きは、や

はり之れ一定の目的に對する手段行爲たるに過ぎぬのである。

果して手段行爲なりとせば、それは目的に叶ひ之を成就するに適するものでなくてはならぬが扱て彼のサボタージュは、労働者が將來、資本主義制を亡ぼして、自ら産業管理の任に當るが如き組織を造り出さんとする労働運動の大目的に對して、果して適當なる手段であらうか。之が鬭争手段であるならば、それは彼の同盟罷業の如く堂々たるもので、資本主階級と旗鼓堂々と相對し、勇士が戰場に戦ふが如く勇戦するものであつて甞めて、將來産業を一手に引受けても美事に之を爲し果すべき労働者の團體を造り上げ、其の生産能力を養ひ、其の經營上の智勇を琢き上ぐるに適應するものではあるまいか。

然るにサボタージュは、西洋などに行はるゝ所で見れば、甚だ陰險なもので、男らしからざるものである。旗鼓堂々と男らしく同盟罷業を行はんにも行ふの力なきが爲めに、已むを得ず工場や其他労働の場所には出て居り、又其の勞

働の部署には就いて居り乍ら、從て勞賃は之を得乍ら、然かも仕事は怠けて之を爲さず、又進んでは最も大事な部分に目に見へぬ様に一寸した事をして機械を役に立たぬやうにしたり、又故意に不出來な仕事をしたり、仕事に故障を生ぜしめたりするのである。洵に卑屈な遣方と謂はなければならぬ。而してそれが陰險で卑屈なるものたることは、之を屢々行ふ内には自ら勞働者をして頹廢的氣風に染ましめ、陰險性を増さしめ、奴隸根性を養はしめて、勞働者の勞働者としての、又人間としての素質を漸次に腐敗せしめなければ止まぬのである。本來は然らざる者も、屢々之を行ふ内には、習自ら性となりて、斯の如く退化するを免れ難い。

されば予は、若し勞働者にして、たゞ單に勞働雇上の條件を善くし、賃錢の値上を得んとするが如きだけの目的で、勞働運動を起し、サボタージュを行ふものならば、而して目的の爲めには手段を選ばずといふものならば、敢て言ふべきことはないけれども、苟も勞働運動をし

て、將來に産業上に勞働者の天下を造り出さんとする大抱負を以て行はるゝものたる限りは、手段はよほど善く之を選ばなければならぬと確信する者で、其の建設的目的に向つてサボタージュの如き頹敗的な手段は適應せざるもの、從て用ゆべからざるものと斷定せざるを得ないのである。

三 然るに或論者は、洵にお説は尤もだが、我國現今の如き勞働者の實狀を以てしては、男らしく堂々と同盟罷工などを行はんにも、事實行はれ難いではないか。有力なる勞働組合もなく法律は之を認めざるのみならず、同盟罷業を行はんとすれば、忽ち治安警察法で脅さるゝ如き狀態を以てしては、陰險でも卑屈でも、今の所サボタージュでも遣るより外仕方がないではないかと言ふであらう。之も亦御尤な説であつて我國現時の勞働者としてはサボタージュでもやるより外、他に大いに資本主階級と戦ふべき道なき事は、予も萬々之を承知して居る。又萬々之を諒とする。けれども其所が問題である。他

に有力なる手段の取るべきものなきに於ては、どんな事をでもしてよいか。目的は手段を神聖にするといったやうな意味で、目的さへ公明正大なものであるならば、サボタージュでも暴動でも、何でも遣るといふことが、果して是認されるべきや否や。其所が即ち問題なのである。

此點に就いては、人々自己の道徳上の立場の異なるに依つて、色々と考へ方も違ふであらうし従て判斷が別れるので、他の人々をして予の考ふるが如くに考へよと強ゐるわけには行かぬけれども、予はたゞ將來產業上に於て新組織の建設せらるゝ曉には、生産上の管理といふ大任務を双肩に荷つて立つべき抱負を有する労働者には、將來の爲めに自重して貰ひたいのである。己むを得なければどんな手段をでも用ゐるといふ風には考へて貰ひたくないのである。餓へたる者は食を選ばずといふやうな態度を取らず、渴しても盜泉の水を飲まずといふやうな意氣込を持つて貰ひたいのである。サボタージュは陰險なもので、労働者の精神を墮落せしめ、其の

素質を腐敗せしむる性質のものであるから、今己むを得ざればとて、たゞ己むを得ざるが故に之を用ゐるといふことは避けて貰ひたいといふのが予の考である。激しき腹痛もモルヒネを注射すれば止まるであらう。けれども人はモルヒネが身體を衰弱せしむる害を恐るゝが故に、屢々之を行ふことは避けるではないか。手段の選ばざるべからざる理由は此所に存する。

現今我國に於ける労働運動の一大缺點は強固なる労働組合のなきことである。労働組合のなきが爲めに平常に於て労働者は其の労働雇傭の契約を爲すに當りて、毎に不利益なる條件の下に契約を爲すのみならず、一朝同盟罷業を行はざる可らざるに至りても、兎角有効に之を行ひて、鬭争上に花々敷勝利を擧げることが出来難い。何といつても労働運動を有効に行はんが爲めには、強固なる労働組合の存在することは前提條件である。されば現今差當つての問題は、何は扱て措き労働組合を組織することであつて労働者は専心之に盡力すべきと同時に、國家も

須らく治安警察法第十七條の如きは之を廢止し、又進むで労働組合法を布きて、労働組合の發達を助ぐべきである。而して其の組合たるや、今更縱とか横とかいふべき筈のものではなく、たゞ労働者をして労働者の爲めの組合を造らしむればよい。所謂縦の組合といふが如きは、中世手工業組合ギルドの如く、雇主と労働者とが階級的に又永久的に區別されて居ない状態の下には造り得らるゝけれども、現時の如く、兩者の間が不可諭的に分離されて、資本主と労働者とが階級的に對立する時代に於て、造り得られるものではない。造り得られても効果のあるものではない。

然しそれは兎に角、或人々の如きは、今労働組合を造らんにも、それは一朝一夕には行はれ難く、又そのよく造り上げられんが爲めには、先づ以て労働者は賃錢に於て相當によき待遇を受け、之を造り得べき力を備へてかゝらなければならぬ。其爲にはストライキをやる必要もあるのに、今それが行はれ難いことから、サボタ

ージニをやるのは洵に止むを得ぬと主張する。けれども考へて貰ひたいことは、英國の如き労働組合の發達せる所でも、労働組合が今日迄に發達するが爲めには、どれだけの時間と努力とを要したか、決して松茸が生へるやうに出来たのではないのだから、そう功を急いで見た所で根據から築き上げてかゝつた仕事でなければ、結局ものにならぬといふことである。

四 殊には又、前にも一言したやうに、労働者が試むる運動はつまり之れ將來のために建設を行はんとする運動である。それで甫めて労働運動といふものに文化的價值もつけば、社會的意義も生ずるのである。労働者は實に此の將來に對する大任務を忘れてはならぬのであつて、之に對する大抱負を持て進み行かねばならぬのだから、サボタージニを行ふの可否の如きも常に之と照し合せて考へて見なければならぬ。今差當り困るから又は已むを得ぬからといつて、將來の大目的を犠牲に供してはならぬ。

若し労働運動にして將來に對する理想なく抱

負なく、たゞ眼前に横はる實錢値上の爲めや、其他勞働雇傭條件改善の爲めのみに行はるゝものならば、それは甚だ價值薄きものである。社會問題として一般の社會生活の運命に關するものとして、之を取扱ふに足らざるものである。まして大いなる文化的價值を之に對して認むることは出來難い。たゞそが將來に對する理想を有し抱負を以て行はれ、之に依りて現時の資本主義的經濟組織を改造し、或は國家社會主義を建設するなり、或はナショナルギルズの組織を建つるなり、何れにしても産業の管理に對して勞働者が全部的に又は部分的に、之に參與するの組織を造り上げんが爲めにせらるゝものたるに於て、それはたゞに勞働者のみに關する問題ならず、引きて社會生活全般に關係し、又一般文化の發展に大影響を及ぼすものとなる。即ち勞働運動は實に大いなる社會的意義を有することゝなるのである。

我國の勞働運動はまだ發足したばかりで、將來は豫測し難いけれども、然し予はそが必ず右

の如き大目的の爲めに行はるゝ社會的運動として發達せむことを希望して止まざると同時に、事實亦必ずや斯く進み行くべきものと信ずる。而して斯く信ずるが故に即ち今發足の當初よりして、サボタージュの如き好ましからざる手段を取りて、自ら好むで此の將來の大任務を荷つて立つべき勞働者の素質を傷け、その精神を墮落せしむるを慨はしく思ふのである。

予は勞働運動を以てたゞ單純なる經濟運動とのみは觀ぬ者である。それは一面經濟運動たると同時に他面に於て人格運動——即ち勞働者が人としての地位の向上、社會的待遇の均等、自由と獨立といふが如きを得むが爲めにする運動なりと觀て居る。而してそが若し單純に經濟運動であつて、人々がたゞ唯物的に金錢利得の多大なることのみ希望し、勞働者も只管に勞賃の拾錢でも五錢でも高からんことを希望し、之を得るが爲めには、サボタージュでも何でも行ふといふのならば、それまでのことであるが、若し勞働運動をして經濟運動たると同時に文化運動

たらしめ、労働者の人としての自由と獨立との爲めといふことも、其の意義の内容を爲すものだとすれば、たとへ今之によりて物質的利益を擧ぐる手段としてサボタージュは有効のものなりとも、それが労働者の人としての價値を傷け其の品性を墮落せしむるものであるならば、大なる損失を救はんが爲めに小なる利益を犠牲にするといふ意味に於て敢て之を行はざることになければならぬ。

何れにしても予は労働運動は社會改造の爲めの運動、將來に合理的なる經濟組織を造り出さんが爲めの運動たるに於て意義多きものと見る。而して將來の生産組織は労働者を以て之が建設に於ける棟梁の材とせなければならぬと信ずるのであるから、かるが故に即ち、其材を惜むの情もだし難く、今よりして既に之を朽ちたる材たらしむるに忍びず、労働者の自重と自尊とを希望する次第である。

五 然るに或人々は言ふであらう。現今サボタージュを行ふは、獨り労働者のみに止らず、

資本主企業家は屢々之を行ひて社會一般に大迷惑をかけつゝあるに、何が故に獨り労働者を責めて、企業家に對して寛大なるかど。他なし、労働者は右述ぶるが如く將來に於ける大建築を爲すべき棟梁の材で、之を惜まなければならぬけれども、かの資本主階級は、既に用事を爲し果てゝ今は却つて論者の言ふが如く社會に害毒を流す腐敗せる無用の材となつてしまつたからである。資本主階級も曾ては大いなる事業を爲し、社會に貢獻したものであるが、今や却つて社會に必用なきのみならず、有害のものとなつてしまつた。何で之を惜むの必要があらう。之を惜むの必要なのみならず、今や之を亡ぼして其の支配より産業界を救はなければならぬこととなつて來たのである。

論者は何が故に企業家等を責めぬかといふけれども、責めぬとは誰が責めぬといふ意味であるか。社會の多數者が之を責めぬといふのならば、社會の多數者がまだそれだけ現時の經濟問題や社會問題に對して理解がないからのことで

若し事實社會の多數者が労働者を責むるを知りて資本主や企業家を責めぬならば、それは甚だ氣毒なことである。けれども、苟も現時の經濟組織の缺陷を知り、労働問題や引きて社會問題の意義を解する者は、決して企業家や資本主を責めぬことはない。之を責めぬ段ではなく、之を責めて飽足らず——即ち之を責むるだけでは問題の解決のつかざるを思ひて、現に熾に資本主階級の撲滅、資本主義的産業組織の改造を要求しつつある次第である。現今此の方面に關する社會問題を呼ぶ聲の喧しきは、即ち資本主や資本主義制を責むる聲なりと見て然るべきである。

サボタージユは現今我が労働者に取りては已むを得ざる闘争手段なりとして之を寛恕せむとする論者自身も、資本主や企業家の之を行ふは不都合千萬なりとするであらう。而して資本主や企業家が之を行ふを不都合なりとし、かゝることの行はるゝ經濟の現組織を改造せざるべからずとする論者が、其の改造を行ふ任に當るべき労働者には、——之を行ふが爲めの運動の一發

現たる労働運動には、却つてサボタージユを寛容せむとするは、聊か撞着ではあるまいか。然し論者は論者として、予はサボタージユの如きは企業家が之を行ふと、労働者が之を行ふと論なく、之に賛成することが出來ぬ。予は其の有形的効果よりも、其の精神——即ちかゝることを平氣で行ふ其の精神を宜敷からずとするのである。而して労働者に對しては、大いに其の將來に囑望するが故に、サボタージユの如き毒酒を飲み慣れて、漸次に其の健康を害することなきやう切に其の自愛自重を希望する次第である。